

東方女子教育協進社による中国女子教育の開発

佐藤尚子

中国の女子教育史は日本と比べて大きな違いを持っている。男女共学が日本より早く実現していることである。一九二〇年から北京大学は女子学生を受け入れ、他の大学もそれに続いた。中等教育における男女共学は少しおくれたが実現した。男女共学が民国時代を通じ、明言されていたわけではないが、実態として存在していた。初等教育における男女共学は日本と同じである。もちろん、女子学校教育の普及は日本の方が早くから進んだ。このような男女共学の受容は、前近代中国における厳しい「男女別あり」の価値観から急速に展開したことになる。旧中国における教育の主要な目的は科挙に及第し役人になることであつたから、女子には教育は閉じられた道であつた。儒教の女性観の影響もあつて女性に独立した人格を認めず、男児の教育における女性の役割も認めなかつた。

ではなぜ、このような急速な展開をみせたのか。日本との違いにもう一つキリスト教宣教会の教育事業が中国女子教育において活発に行われた点がある。宣教会によるキリスト教女子教育は決して男女共学を前提とするものではない。しかし、これらの学校教育がもたらした国際社会の共通ルール、システム、カリキュラムが影響を与えたことが考えられる。本研究では、西洋キリスト教世界が中国女子教育に着目し、中国宣教の重要な手段であると発見した最初の例として英国の「東方女子教育協進社」(Society for Promoting Female Education in the East)を取り上げる。

I キリスト教宣教会の中国伝道

一九世紀初頭、プロテスタント宣教会の中国伝道が開始された。一八四二年、アヘン戦争に敗北した清朝政府は開港場での伝道を認め、一八六〇年から内地伝道が始まった。欧米宣教会は宣教事業とともに教育や出版印刷、医薬治療に進出したが、この中で教育事業の影響がもつとも大きかった。中国における公教育の開始は一九〇四年であり、それまでは欧米宣教会が学校教育を提供し、また、引き続き中国の各学校段階で教育事業を展開していたからである。

中国におけるプロテスタント宣教会の教育事業は、一八三九年設立された澳門のモリソン学校に始まるとされる。その後、開港場には初等教育を施す小規模なキリスト教学校が多数出現した。一九〇四年に清朝は近代学校制度を発足させたが、女子のための学校制度は一九〇七年まで待たなければならなかった。このような中国女子教育の遅れが西洋キリスト教世界から着目されることになったのであった。

やがて、一九二〇年代後半になると、中国全土にナショナリズムが高揚し、これらのキリスト教学校は欧米列強の中国侵略の先手として激しい糾弾を浴びることになる。そのため、外国のミッションスクールから中国のキリスト教学校への転換を余儀なくされるが、同時に私立学校としての公認を得て、中国公教育を補完する地位を築いていった。しかし、やはり、社会主義中国となつて、その外国依存を非難され、ついにその活動の幕を閉じなければならなかったのである。

戦前日本のキリスト教学校が一一四校（一九三〇年、基督教学校教育同盟『日本におけるキリスト教学校教育の現状』一七頁）であったのに対し、中国キリスト教学校は一三、六三七校（一九二五年、舒新城『收回教育権運動』四二頁）とその数が大きい。一方、中国キリスト教学校の歴史に対する評価はどうかというと、現代中国において最近はかなり高い。『中国教会学校史』（高時良主編、湖南教育出版社、一九九四年）は

- (1) 中国と西洋の文化交流を促進した。
- (2) 先進的な科学技術の知識と技能とを輸入した。
- (3) 女子教育を開発した。
- (4) 近代学校教育のモデルを導入した。
- (5) 学校管理体制を打ち立てた。

と高く評価している（同書一九二一—三〇一頁）。

このように中国キリスト教学校が女子教育の開発者とされるのはなぜであろうか。なぜ、女子教育であったのか。

一つの理由として女性宣教師の存在が考えられよう。日本において「明治初期、プロテスタント・キリスト教の宣教師によつて、日本における近代的な女子教育が着手されたことは、広く知られている。婦人宣教師を創立者とする、いわゆるミッション系私立女子校は今日に至るも健在であり、その一部は大学を擁して、日本の女子教育に一定の影響力を保持している。」と言われているからである（小松山ルイ『アメリカ婦人宣教師』東大出版会、一九九二年、一頁）。この事は中国においても全く同じである。しかし、中国において近代的な女子教育を開始した東方女子教育協進社とは何か。イギリスの宣教会を示す名称を持っていない。中国最初の女子校の設立運営に関わつた東方女子教育協進社の活動の考察が必要となる。

II キリスト教宣教会による中国女子教育の開始

一八四四年、中国寧波に寄宿制のキリスト教女学校が設立された。それは東方女子教育協進社が派遣したミス・アルダーシー (Mary Ann Aldersey, 1797-1868) により創設された。その後、中国では次の表1のようにキリスト教女学校の設立が続いた。

アメリカの宣教会による設立が圧倒的に多いが、最初のキリスト教女学校はイギリスにより設立されたのである。「海外伝道への出資において、アメリカがイギリスを追い越すのは漸く第一次世界大戦の少し前である。ところが、女性の手による海外伝道だけを比べてみると、すでに一八八九年の時点でアメリカはイギリスをはるかにリードしている。」（小松山ルイ、前掲書、一八頁）と言われているが、一八三四年に東方女子教育協進社がイギリスに誕生している。女性の手による海外伝道は最初にイギリスで生まれたのである。

このようなアメリカ・イギリス人女性による活動にも関わらず、中国の女学校は次の表2表3のように遅々とした

歩みしかみせていない。当時の中国では、男子の教育には最大限の力を尽くすのに女子に教育の価値を認めることはきわめて稀であった。女子を学者や役人にする希望も欲求ももてないからであった。いち早く中国における女子教育の惨状に気がついたのは、アビール (David Abeel) というアメリカ人在華宣教師であった。彼はアメリカで、アメリカの女性が中国などの女性を対象に伝道団体を組織することを提唱した。しかし、既存の宣教会の猛反対にあった。イギリスでも同様の提唱をおこない一八三四年に東方女子教育協進社が結成されたのである。

Ⅲ 東方女子教育協進社とは何か

中国において早くから女子のための学校教育を開始したのは欧米宣教会であった。中国に到着した宣教師の妻や女性宣教師たちがすぐに、女子のための学校を設立し運営したからである。その最初の学校は、一八四四年寧波に設立されたミス・アルダーシーの女学校である。彼女は、一八三四年ロンドンで結成された東方女子教育協進社から最初に中国に派

表1 キリスト教女学校の設立

1851年	上海文経女塾 (米国聖公会)	1872年	北京慕貞女塾 (米国美以美会)
1854年	福州文山女子中学校 (米国公理会)	1873年	九江儒励女塾 (米国美以美会)
1860年	上海清心女塾 (米国北長老会)	1874年	武昌布倫女塾 (米国聖公会)
1864年	北京貝満女塾 (米国公理会)	1888年	広州培道女塾 (英国)
	福州陶淑女子中学校 (英国)	1890年	上海中西女塾 (米国婦人南監理会)
1868年	広州真光書院 (米国長老会)		

出典：郭衛東他『近代外国在華文化機関総録』より作成

表2 キリスト教女学校の発展

西 暦	学校数	生徒数
1849年	3	50名以下
1860年	12	165名
1869年	31	556名
1877年	38	524名
1896年	308	6798名

出典：梁歐第他『近代中国女子教育』1985年、pp.32-33。

表3 清朝末期の女学堂

西 暦	女学堂数	生徒数
1904年	25	468
1905年	71	1,665
1906年	233	5,945
1907年	391	11,936
1908年	513	18,202
1909年	722	26,465

出典：同 左 p.38

遣されたが、この組織は、宣教会との密接な関係をもたない単立の団体であった。会員欄には名流婦人の名が見られるが、一般女性も個人の資格で多数参加していた。個人が払う会費で運営されていたのである。英国において女性の自覚が進んだこの時期に結成された、いわば女子教育を中心にした女性解放運動を東へ東へと進める団体であったと言えよう。

女侯爵を会長にし、その他の役員全てが女性であった。独身女性もいれば既婚女性もいた。会則を見ると、次のようになつていた。(Female Missionary Intelligencer, January, 1862)

(1) この会の目的は、東方に学校を設立することおよび学校の維持管理である。東方においては望ましい教育機会が提供されなければならない。そのために敬虔でよく教育された人を校長として派遣できるように、この国で選抜し準備する。また、現地の教師を従わせられるよう訓練し励ます。

(2) 必要な資金は他の組織と同様集められなければならない。年会費、寄付金であり、その他可能な方法で集める。

(3) この会と関係をもつた学校においては、生徒が聖書についての知識を獲得すること、そして救い主イエスを信じるのが常に目指されなければならない。また、生徒の環境から望ましいと思われるその他のすべての有用な知識が知らされなければならない。

(4、5、6略)

会則から東方における女子の教育によつて信徒を獲得していくことが目指されたことがわかる。宗派は記されていない。東方女子教育協進社の他の文書にも宗派性はない。アルダーシーは非国教徒であり、非国教徒の女性の伝道組織であると考えられる。

経費については一八六三年の報告によれば、三、六八九ポンド余りの収入があつたという。その内訳をみると直接

的な寄付が一、〇四二ポンド、会費と補助団体からの寄付が二、〇六一ポンドでこの二つが大きな比率になっている
(*Female Missionary Intelligencer*, January, 1863, p.22)。キリスト教伝道団体ではあるが、イギリスの教会や宣教
会とは関係のない女性会員組織で支えていたことが理解できよう。

当時のイギリスはヴィクトリア朝時代であり、産業革命が進行していた。豊かになった中産階級の女性たちが活発
に家庭外での活動を始めた時期といわれる。その中で、東方への海外伝道がイギリス女性の心を捉えたのである。し
かし、当時は男性主体の海外伝道が展開していたと思われる。受け入れられなかった女性達が自分達で組織を作り、
経営し、女性教師を養成し、海外へ派遣したのであった。日本のキリスト教女子教育はアメリカにおける女性解放の
歴史とともに進んだという。中国の場合はイギリスにおける女性解放の歴史とともに始まったということが出来る。

IV 東方女子教育協進社の活動

それでは東方女子教育協進社はどこでどのような活動をおこなったのであろうか。次に示すとおり、東方の範囲が
きわめて広がったことがわかる。(*Female Missionary Intelligencer*, January, 1862)

(1) 出先機関の設置

ケープタウン、マドラス、ボンベイ、シンガポール、ホンコン、モーリシャス、レバノン、カイロなど

(2) 現地の学校への援助

中国、ビルマ、ベンガル、オリッサ、テネペリ、サウストラヴァンコール、セイロン、カフウアランド、
シエラレオネ、アルジェリア、カイロ、ペイルートなど

(3) 他の学校で働く現地人女性への援助

シンガポール、ホンコン、モーリシャス、レバノン、カイロなど

さらに次表4は、東方女子教育協進社の補助を受けた生徒数を示している。補助の金額が判明していないので、東方女子教育協進社がどの程度、目的を遂げたのかが不明である。しかし、中国では東方女子教育協進社は最初の女学校を作ったという名譽ある地位を占めている。中国女子教育の発展には宣教会だけでなく、イギリス女性の自覺の高まりが関係していたことは明白で興味深い。

表5は、東方女子教育協進社から人的金銭的援助を受けた学校数を示している。一八六一年頃と一八六七年頃の状況である。この間に、その数が一・三八倍になったことがわかる。各地域もそれぞれ増加している。まだ、すべての年度にわたって数量を知ることができないが、東方女子教育協進社の活動は、アジアとアフリカの各地域に広がっていたと思われる。

V アルダーシーの女学校

それではアルダーシーはどのような活動を行ったのであろうか。ミス・アルダーシーは裕福なロンドンの非国教徒の家に生まれた。教派に属さない独立宣教師であった彼女はまた、中国における女性宣教師のパイオニア的存在であるといえる。アルダーシーの活動を見てみよう (Margaret E. Burton, *The Education of Women in China*, Fleming

表4 特別献金によって支えられている子ども

中国	13名	北西地方*	96名
ガンジス以東	4名	南アフリカ	3名
ベンガル	28名	西アフリカ	8名
マドラス	20名	地中海東部	9名
ムンバイ	1名		

出典：Female Missionary Intelligencer, January, 1862.

*詳細不明、インド北西部と思われる。

表5-1 東方女子教育協進社の援助学校数 (1861年頃)

	寄宿制の学校	孤児院	通学制の学校	幼稚園	計
中国	3	2	7	—	12
ガンジス以東	3	—	14	—	17
ベンガル	13	3	20	5	41
マドラス	24	57	—	—	81
ムンバイ	4	—	7	—	11
北西地方	3	4	8	1	16
セイロン	2	—	22	—	24
モーリシャス	—	—	1	—	1
南アフリカ	6	—	24	4	34
西アフリカ	1	1	2	—	4
地中海東部	5	1	6	—	12
総計	64	68	111	10	253

出典：Female Missionary Intelligencer, January, 1862

表5-2 東方女子教育協進社の援助学校数 (1867年頃)

	寄宿制の学校	孤児院	通学制の学校	幼稚園	計
中国	3	*	12	—	15
ガンジス以東	2	—	7	—	9
ベンガル	13	5	27	5	50
マドラス	23	—	72	—	95
ムンバイ	6	—	20	—	26
インド中央	—	—	1	—	1
北西地方	9	*	34	—	43
セイロン	3	—	25	—	28
モーリシャス	1	—	1	—	2
南アフリカ	7	—	27	*	34
西アフリカ	4	*	9	—	13
アルジェリア	—	—	1	—	1
地中海東部	4	*	30	—	34
総計	75	5	266	5	351

出典：Female Missionary Intelligencer, December, 1867

*左欄に包括される

H. Revell, 1911)。

一八一六年 中国語学習の開始。

一八二四年 ロバート・モリソンから中国語を習う。(一八二六年まで)

一八二七年 ロンドン会へ寄付し、一人の女性宣教師をマラッカに送った。

一八三二年 マラッカ伝道団に参加。(妹の六人の子の世話のため中止)

一八三七年 バタビア(現在のジャカルタ)で華僑女子のための学校を設立。

アルダーシーの心は中国に向かっていた。

一八四四年 寧波に最初の女学校を設立、寄宿制の女塾であった。

また、同書はアルダーシーの困難な教育活動を次のように記述している。

教師 Laisun はバタビアから従ってきた。パイオニアの女学校が直面したものはきわめて強力な慣習(女子無才、ただ手芸の教育のみ)であった。アルダーシーに対する自然な質問は「なぜ来たのか」であった。また、彼女には隠された動機があると言われた。自分の子供すべてを殺したので、今度は他人の子供を殺したいと思っているのだなどである。健康によいとして、アルダーシーが持ち歩いてきた香る塩は悪魔の精神をばらまいていると言われた。

その後のアルダーシーについて、次のように報告されている (Dean, *The China Missions*, p.141)。

一八四五年 McCahee 博士（寧波の長老会宣教師）の報告によると一五名の生徒がいた。

一八五二年 E. W. Syle 牧師が寧波を訪問（出典：Spirit of Missions, 一八五二年三月）、その報告によれば、寧

波市の中心部に広い家を借りていた。生徒四〇名、科目は共通の学科と裁縫、刺繍であり、実際の女子の生活にあわせる努力を行つたという。

一八六一年 一三年後、健康を害したので寧波の長老会女学校と統合を計画。オーストラリアのアデレードへ引退した。こうして中国を去つたが、よく訓練された中国女性を残した。

彼女の学校は、一年後に一八名、八年後に四〇名が在籍しただけであつた。このように、生徒がなかなか集まらなかつたのは、外国人は「子供の目玉を取つて棄にする」「悪魔であり、子供に悪魔の心を植え付ける」と当時しばしば言われていたこともあつた。がしかし、中国の伝統が最も阻害したと思われる。女子に対する学校教育は、中国社
会にとっては革命的なことであつたからである。このような革命的な事業の最初がアルダシーの女学校であつた。

南京の宣教師の報告によれば、卒業生の Mrs. 夫人の有能な仕事ぶりを見て、アルダシーによる教育を「たつた一人の生徒しかもたなくても、感謝するように教育されている」と高く評価している。南京の長老会女学校の校長（女性）のアルダシーの卒業生についての報告によれば「秘書は私の欲していた人であつた。その仕事にびつたりの人であつた。寮母は結婚していたが、給料が寧波の三分の二になつても来てくれた。」というこれもまた高い評価が報告されている (Mrs. Leaman, In Woman's Work for Woman, 1889, March)。

カリキュラムについては、一九〇〇年五月の五つの女学校のカリキュラムがアルダシーの時代よりも進んでいた。また、メソジスト派の女性宣教師団体の実行委員会では、一八八三年に福州の中国人伝道者からもっとリベラルな教育が必要なのではないかという請願が提出されたというところで、英語、音楽が導入されたという。その意味では、アルダシーの学校はきわめて程度の低い内容であり、また、生徒の人数も前述したように少なかつた。しかし、女子教

育の需要、たとえば伝道者の妻として働くよく訓練された中国女性の必要性を認識させたのであった。このようにアルダーシーの例から、キリスト教女学校設立への強い議論を起こしたといえる。キリスト教女学校の中国における拡大の必要性をだれも疑わなくなったため、アルダーシーが最初の女学校を建ててから、中国にキリスト教女学校が続々とたてられるようになったのであった。